Osaka University Knowledge Archive

Title	中国語を母語とする上級日本語学習者のスピーチレベルの選択基準
Author(s)	上仲, 淳
Citation	大阪大学言語文化学. 2007, 16, p. 141-154
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77875
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

中国語を母語とする上級日本語学習者のスピーチレベルの選択基準*

上仲　淳**

キーワード：スピーチレベルの選択基準、社会的ネットワークと接触場面、
中国語を母語とする上級日本語学習者

This research studies how speech level is chosen by a specific, advanced level Japanese learner of Chinese mother tongue (hereafter named "C"). A qualitative analysis was made of actual contact situations in C's social network, in order to describe the criteria of how she chooses speech levels. This was assessed by her choice of either polite form with *desu/masu* or plain form without *desu/masu* at the end of sentences; and sometimes the politeness of vocabulary.

The study found that C's speech level criteria consist of three categories, "Criteria for use of polite form", "Criteria for use of plain form" and "Strategies to achieve communications". The former two categories have primary components of "addressee", "situation" and "accommodation adjustment", and each of them has more detailed factors. When a conflict occurs between those factors, C has certain priorities. For example, psychological distance is given priority over social position; and the social position is given priority over accommodation adjustment. Those categories sometimes contain interlanguage factors in her choice of speech levels, which are found in C but seem not found in native Japanese speakers. In addition, C sometimes exhibits subconscious language use, in that her utterances were sometimes different from her awareness.

It was found that C's speech level styles have been strongly affected by her social network, especially her part-time job experiences, in which she has been more accustomed to using plain form and Kansai dialect than polite form.

---

* The Criteria of Speech Level Choice Made by an Advanced Japanese Learner of Chinese Mother Tongue (UENAKA Jun)

** 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程

1　はじめに

我々は言語使用の際、対話相手や状況に応じて最も適切であると思われる言語形式の選択を行い、なおかつ同一談話内においてもその言語形式を時折切換えながらコミュニケーションを行っている。日本語を使用して話す場合、適切な「スピーチレベル」（文末の「です／ます」の使用・不使用と、語彙の待遇度）の選択という問題は避けては通れない。本稿では、日本国内の日本語学習者（以下NNS）の中で最も人数が多いとされている中国語を母語とする者のうち、ある特定の上級の学習者（以下C）が、日常生活で遭遇する日本語母語話者（以下NS）との接触場面[1]においてスピーチレベルをどのように使いわけているのかを調査し、Cのスピーチレベルの選択基準[2]を明らかにすることを目的とする。

複雑な敬語体系を有さない中国語を母語とするCは、自ら習得した社会言語規範[3]に基づいてスピーチレベルの選択を行わざるをえない。Cのスピーチレベルの選択基準は、NSと同様のものもあれば、Cに特有の中間言語的[4]な基準もありうるであろう。

本論ではCをとりまく社会的ネットワークの中から、日常的に行われている接触場面を抽出し、そこで行われた実際の談話を基にして、スピーチレベルの使い分けの習得が調査時点でどのような形になっているか、その一端を見たいと考える。

スピーチレベルの研究は近年非常に増えてきているが、調査者によって作為的に組み合わされた対話相手との実験室における談話データを扱ったものがほとんどで、調査対象者の私生活で日常的に行われている生の談話を扱ったものは極めて少ない。そういう意味においても本研究は非常に意義深いものであると考えられる。

2　先行研究

丁寧体（「です／ます」の使用）もしくは普通体（「です／ます」の不使用）というスピーチレベルの選択については、鈴木（1997）に述べられているように、話し手と聞き手の、上下・年齢差・親疎・ウチ／ソト・場面といった要因によって決定され、その選択についてはNSの間にほぼ共通した認識が存在する。

橋本・三井（2005）によると、日本人は人物カテゴリーを「ウチ・ソト」といった二項

1）Fan（1994）によると、接触場面の下位分類には、①相手言語接触場面、②第三者言語接触場面、③共通言語接触場面、の3つがあるが、本研究では①のみ、つまり、日本語の母語話者と非母語話者が日本語を使ってコミュニケーションをする場面のみを扱う。
2）本稿では、スピーチレベルの選択のみを扱い、スピーチレベル・シフト（同一談話中の同一話者による発話毎のスピーチレベルの変動）は扱わない。
3）接触場面におけるNNSの社会言語規範については、加藤（2006）に詳しい。
4）中間言語（Selinker1972）とは、目標言語に向かう発達過程にある中間的な独自の体系。本稿はスピーチレベルの選択基準に関する中間言語的な様相を研究対象とする。

対立的な一つのものさしで捉え、中国人は「親疎」「上下」の二つのものさしが大きく関わっているという。日本人のウチ・ソトに関しては井出（1992）に詳しい。井出は多言語間の依頼表現のアンケート調査をもとに、日本語のみが丁寧度が高い表現と低い表現が二極分化すると述べている。日本語の複雑な敬語表現のバラエティーのうち「です／ます」という丁寧語が他の言語表現よりはるかに優勢に働いてウチ・ソト認知と相関しているという。さらに、上下という縦の距離と親疎という横の距離が一つの距離（Perceived Distance）として認知され、それが二つのカテゴリー（ウチとソト）に分けられるとしている。

中国語を母語とする日本語学習者のスピーチレベルに関する研究では、日本人は「ウチ・ソト」が判断基準になり発話スタイルの選択を行うのに対して、中国人や台湾人は、「親疎関係」や、発話行為の「内容の軽重」が発話スタイルの選択を行う際の重要な判断基準になる（山口　2002）という報告がある。ただし、山口はDCT（Discourse Completion Test）を用いた記述式調査による談話完成テストを基にしており、実際の発話データを使っているわけではない。DCTでは、調査者が設定する「親・疎」や「上・下」というカテゴリーがあらかじめ決められており、調査者のバイアスがかかるだけでなく、仮想上の人物カテゴリーに対して調査対象者がどのような人物を想定するかによっても結果が異なるという問題点がある。

そこで本研究では、NNSの実際の言語運用に基づき、また、仮想上の人物ではなく、現実の社会的ネットワークの中に存在する対話相手との生の談話データを用いて考察したい。

3　調査方法

3．1　調査対象者とデータ収集方法

ACTFLによる日本語OPIの判定基準[5]によると、中級は「普通体か丁寧体のどちらか一つがよく使える」、上級は「主なスピーチレベルができ、敬語の部分的コントロールが可能」、超級は「スピーチレベルに問題がない」とされている（牧野 1991）。つまりスピーチレベルの使用において、中級から超級の間に位置する上級の学習者こそが、NNSのスピーチレベルの中間言語的な様相を観察するのに最も相応しい調査対象者であると考えられる。

そこで本研究では、日本語能力が上級であると判断された関西の某大学で日本語学を専攻している中国語を母語とする2年次の学部留学生[6]（C）を調査対象者とした。中国

5）ACTFL - OPIとは、the American Council for the Teaching of Foreign Languages - Oral Proficiency Interviewの略である。スピーチレベルは「社会言語学的能力」の一つであるとして、日本語OPIのレベル分けの判定基準が設定されている。
6）Cが2年生から3年生に進級する時期にデータ収集した。

の南東部出身で31歳の女性、在日期間は3年、日本語学習歴は専門学校で1年と大学で2年の計3年間である。

本稿で、調査対象者をC一人に絞った理由は、ある一人の人物を取り巻く社会的ネットワークから言語行動までをより深く質的に掘り下げて分析し考察するには、ケーススタディーが有効であると考えたからである。

データの収集方法は、まず、Cの日常生活で日本語を多く使用する具体的な相手と場面をリストアップした。そしてそれらの対話相手とのできるだけ自然な会話を録音してくれるようにCに依頼してICレコーダを貸し出した。対話相手となるNSにはすべて筆者が事前に実験のお願いをし、了解のもとに会話を録音した。録音中はICレコーダーを見える場所に配置して録音した。ポケットに入れておいた場合は録音後にNSにその旨伝えた。そして約1週間後に回収したレコーダから会話を書き起こし、2週間以内にフォローアップ・インタヴューを行った。

3．2　本論におけるスピーチレベルの定義

スピーチレベルは文末のスピーチレベルと語のスピーチレベルに大きく分けられるが、本稿では、特に文末のスピーチレベルに注目し、丁寧体（「です／ます体」の使用）と普通体（「です／ます体」の不使用）の2分類[7]とする。付随的に、語のスピーチレベルも必要な場合は考慮するが、「狭義の敬語（尊敬語や謙譲語）」あるいは「軽卑語」があった場合のみ言及し、それ以外は特に問題としない。また、本稿では方言形もスピーチレベルに含めて考察する。例えば関西方言で文末の「～や」は標準語の「～だ」に相当するので普通体とし、「ますねん」など「です／ます」が現れる形式は丁寧体とする。Cの方言使用[8]に関しては5．3で述べる。

4　Cの社会的ネットワークと接触場面

Cはほぼ毎日、立ち食いうどん店かラーメン店のいずれかでアルバイトをしている。それぞれのアルバイト先で最も会話をする機会が多いのは、九州出身の中高年女性で先輩のFA1（60s）[9]と、ラーメン店の店長MA2（22）である。2箇所とも留学生のアルバイト生が多く、日本人の話し相手は限られる。アルバイト・ドメインに続いてCの日本語使用が多いのは大学ドメインである。ところが、Cはサークル活動等に参加して

7）三牧（2002）は、丁寧体の言い切りと、丁寧体に「よ」「ね」などの終助詞や婉曲の「けど」が付加したものを区別しているが、本稿では特に区別しない。
8）ここでの方言とは地域方言を指す。
9）一文字目のMは男性、Fは女性。二文字目はアルバイト・ドメインがAで、大学（教員）ドメインがTとした。（　）は年齢。対話相手の年齢は実際の年齢ではなく、あくまでCが知っている限りの年齢かあるいは主観的に判断した年齢である。60sとは60代の意。

いないためか、大学で親しくしている日本人の友人は特におらず、大学教員とむしろ会話を交わすことが多い。Cはアルバイトと大学以外では日本語を使用する機会はほとんどなく、それ以外ではテレビや漫画といったメディアから日本語を学ぶことが多いという。

このようなCの社会的ネットワークの中から、対話相手（addressee）、場所（place）、話題（topic）の変数を考慮した上で、以下の7場面を取り上げた。

表1　Cの主な接触場面の詳細

ドメイン	談話番号 録音時間 （分：秒）	対話相手	役割関係[10]	場所	状況	話題
アルバイト	1-① 15:07	FA1 (60s)	アルバイト先の先輩と後輩（年齢的には相手がかなり上）	職場 （うどん店カウンタ内）	仕事中、お互い手のすいた時間に雑談	カテキン茶、ビール、社会保険の掛け金
	1-② 8:01	MA2 (22)	建て前上は店長とアルバイト店員であるが、年齢がかなり下であるため、姉と弟という感覚	職場 （ラーメン店内）	深夜、閉店後。情報交換および雑談	売り上げ、体調、携帯料金未納、給料
大学（教員）	1-③ 5:44	FT1 (50s)	先生と学生の関係。上下意識がある。	研究室	ゼミに入れてもらえるかどうか、かなり緊張して打診	春休み中の先生の予定、ゼミ受け入れの状況
	1-④ 15:50	FT2 (40s)	先生と学生の関係。（FT1と同程度の上下意識がある。ただしFT1よりも心的距離は小さい）	研究室	情報収集。ゼミ選択の助言をもらう	Y教授の最終講義、窯焼け、古典の授業の時間割、卒業後の進路とゼミ選択、古典を題材とした漫画の紹介
	1-⑤ 27:09			学生食堂	交話[11] 目的	日本語の発音、関西弁、将来の夢、先生の家族
	1-⑥ 13:35	MT3 (30s)	元先生ではあるが、あまり先生とは意識せず。	学外 （喫茶店）	久しぶりに再会し、近況報告	期末テストなどの近況報告、神戸、中国の親戚
	1-⑦ 20:20			MT3の自動車内	談話データ録音のために大学に向かう車中の会話	MT3の出身校、日本人学生の勉強態度、駐車場、電車のチケットの授受

5　Cの接触場面におけるスピーチレベル

5．1　Cの対話相手によるスピーチレベルの使い分け

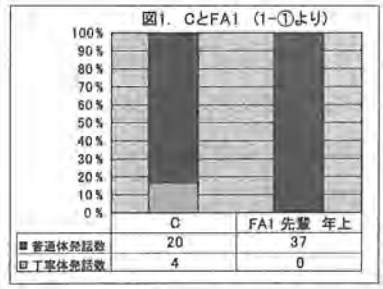
ここではCの対話相手の違いによるスピーチレベル設定の様相を見る。

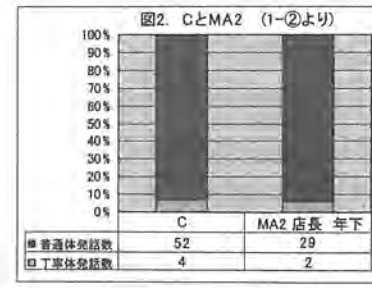
アルバイト・ドメイン

Cが最も日本語を使う機会が多いのがアルバイト先（うどん店と、ラーメン店）である。以下の図はそれぞれのアルバイト先で、Cと対話相手（FA1, MA2）の文末のスピーチレベルを並べて表示したものである。グラフ下の実数は発話数で、棒グラフは丁寧体と普通体の割合をパーセンテージで表示してある。

Cは、うどん店の先輩であるFA1（年上60代）と、ラーメン店の店長MA2（年下22

[10] このリスト内の役割関係は、筆者がフォローアップ・インタヴューで、「対話相手との相対的な関係」としてCから聞き出した内容をもとに記述している。
[11] 交話とはphatic（Malinowski 1923）の訳語で人間関係を確立し、円滑にする機能をもつ。





歳）に対して、ともに、丁寧体使用率が17％と7％という低い割合であった。

下に挙げる談話は、ラーメン店の店長MA2とCが閉店後、店内で話している談話の一部である。話題は、MA2の最近の体調が悪いことについて話している。

（談話例1）ラーメン店での会話（1－②より） 会話参与者：C, MA2

41　MA2　ほんま体調わるいねん
42　MA2　最近9時間働いたら体がな
43　C　うそや
44　MA2　ほんまや
45　C　でも顔元気にしとる
46　MA2　え？元気そうやけど＃＃
47　C　元気そうな顔してる
48　MA2　いつも2時頃なったらフラフラなってるもん
49　C　どうしました？ |笑：ふふっ|
50　MA2　黙秘いたします
51　MA2　黙秘、黙秘、黙秘
52　C　まだ21歳やでー
53　MA2　黙秘、黙秘いたします
54　MA2　21ちゃうやん22や

（※46の記号＃＃は聞き取り不能を示す。拍数に合わせて＃をふった）

このようにCは方言まじり（波線部分）の普通体を多用し、MA2と会話を展開している。Cの談話の中では唯一49の発話のみ丁寧体（下線部分）となった。一方のMA2のほうは関西方言を使った普通体の会話を自然に行っており、フォリナートークは全く見られない。発話番号50と53では、「黙秘いたします」というように、「ます形」と謙譲語を併用しているが、これはCに対する敬意の表現ではなく、「体調の悪い理由は決して教えられない」という意図を冗談めかして丁寧体を使って表現しているだけである。

Cはフォローアップ・インタヴューで、「MA2は一応店長だけど、上司って感覚は全くない。なんでも遠慮なく言える。自分の弟みたい。職場ではMA2が一番年下。他の中国人のアルバイトもみんなMA2に対して敬語（です／ます）は使わない」と語っている。

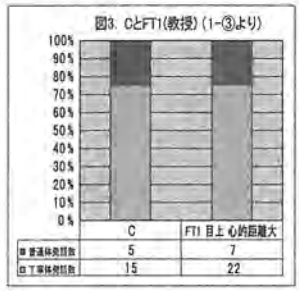
一方、うどん店のFA1に対しては、「（アルバイト先の）先輩と後輩」というふうに捉えながらも、「上下意識はあまりない」と感じている。けれども、「一応年上だから、思い出したら「です／ます」を使う」とも述べており、普通体を基調としながらも、

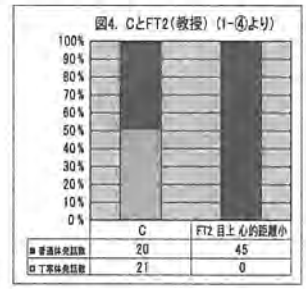
MA2に対してよりも若干高い丁寧体使用率になった。

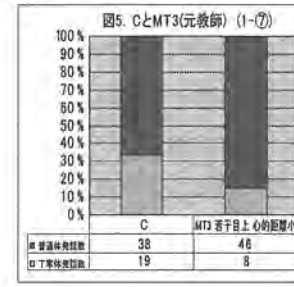
このように、Cは「目上の人であっても距離が近いと感じたら普通体を使う」と述べている通り、社会的役割や年齢が相手のほうが上であっても普通体を多く使用し、心的な距離感に重点を置いてスピーチレベルの選択を行う傾向があるといえる[12]。

大学（教員）ドメイン

次に、Cの大学ドメインのスピーチレベルの使い分けを見る。Cはサークル等に所属していないこともあり、同じ大学内に懇意にしている日本人の友人はいないため、大学ドメインでは大学教員が主な対話相手となる。以下、FT1, FT2, MT3の3人の教員に対してCがどのようなスピーチレベルで発話を行なったか図に示す。







先のアルバイト・ドメインに比べ、大学ドメインでは総じてCの丁寧体使用率は高い。大学ドメインの中では、FT1への丁寧体使用率が75％で最も高く、次いでFT2へ51%、MT3へ33%という順に丁寧体の使用率は低くなっている。Cの基本的スピーチレベルが50％を超えて丁寧体基調となったのは、FT1（図3）とFT2（図4）の談話のみであった。

以下に、Cの丁寧体使用率が最も高かったFT1との談話を抜粋する。

（談話例2）　FT1の研究室にて（1－③より） 会話参与者：C, FT1

18　FT1　2月は ＜1秒＞ はい、たい、うん、ほとんどいます
19　C　あーほとん、学校にいらっしゃいます？
20　FT1　はい、学校に来ます
21　C　はい、わかりました　|笑：はふふっ|
22　FT1　それだけ？
23　C　あ、先生、ゼミのこと決め／
24　FT1　／いや、まだ聞いてないです
25　FT1　私は先週は、先週出張でいなかったんですよね
26　C　あー　|笑：ははは っ|
27　FT1　サモアにいってきましたから
28　C　え一忙しいですね
29　FT1　え一忙しいんですよ

（※　23, 24の記号／はオーバーラップを示す）

[12] ほかにも、社会的役割よりも心的距離を優先する例として、「ラーメン店の社長（50s）や部長（40s）に対して、最初は「です／ます」を使っていたが、最近はよく冗談を言ったりして仲良く感じるので普通体で話す。MA2や他のアルバイトが、社長や部長に対して丁寧体を使っていても合わせようという気はない」とインタヴューで語っている。

CとFT1はこのように、双方が丁寧体を非常に多く使用しながら話している。発話19では「いらっしゃいます」という狭義の尊敬語も見られた。図3を見ると、双方が70％台というほぼ同程度の高い丁寧体使用率で話し、対称的な構造になっている。CにとってFT1はそれほど親しい先生というわけではなく、心的な距離が大きかったことに加え、来年度のFT1のゼミに入れるかどうかの打診をするという比較的緊張したフォーマル度の高い場面であった。談話中に所々笑いが見られるのは、場の雰囲気を多少なりとも和ませようとするCの一つのストラテジーであると考えられる。

FT1とFT2は両者とも教授であるが、二人を比較すると、FT1よりFT2のほうが心的距離が小さい。Cは「FT2は一番よく話す先生。時々Eメールもする。文学の話をする。住んでいるところが近いので登下校で時々電車やバスが同じになる」と語っている。その言葉通り、図3および図4をみれば、実際のデータも、FT2へ対する発話の方は丁寧体使用率が20％ほど低くなっている。図4に特徴的なのは、FT2がCに対して普通体100％で話しているため、まったく非対称な構造になっている点である。これは、社会的上位にある者は下位の者に対して基本的スピーチレベルを丁寧体にでも普通体にでも設定できることを示唆している。

残るMT3は過去にCに日本語を教えたことのある元教員である。CはMT3のことを「先生だけど話すときは先生だとあまり意識していない。よく知っている。緊張しない」と述べた。年齢的にも他の二人の教授ほど離れていないMT3に対して、Cは三人の教員の中では最も低い33％という丁寧体の使用率であった。

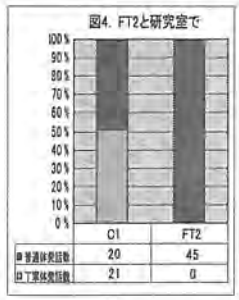
Cはさきに、アルバイト・ドメインのところでも言及したように、「目上の人であっても距離が近いと感じたら普通体を使う」傾向があり、ここ、大学（教員）ドメインにおいても、FT2やMT3に対して見られたように、心的距離の縮まりと並行して丁寧体から普通体への移行を積極的に行っていることが明らかになった。

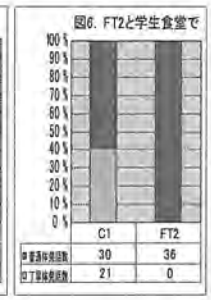
5．2　Cの場面によるスピーチレベルの使い分け

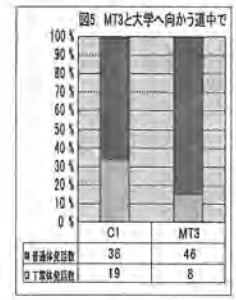
本節では、Cが同一の対話相手に対して、異なった場面でどのようにスピーチレベルを使い分けるかについて考察したい。

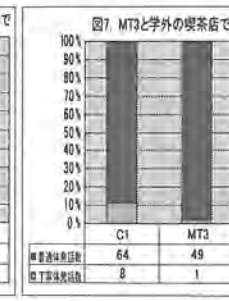
図4（既出）と図6は、Cが同じFT2を対話相手として、異なった場所（「FT2の研究室」と「学生食堂」）で話した際の結果である。また、図5（既出）と図7は、同じMT3を対話相手として、異なった場所（「大学へ向かうMT3の自動車内」と、「学外の喫茶店」）で収録した談話データを並べて表示したものである。

図4と図6を比較すると、研究室よりも学生食堂の談話の方が、Cの丁寧体使用は若干下がっている。同じ対話相手でも、研究室と学生食堂では場面のフォーマル度に違い









があり、Cのスピーチレベルへも影響を与えたと考えられる。

また、MT3を同じ対話相手とする図5と図7では、大学へ向かう車内では丁寧体使用率が33％で、学外の喫茶店では11％という結果が得られた。興味深いのはCの丁寧体の使用率が下がった図7では、それに呼応するかのようにMT3の丁寧体の使用率も下がっている点である。図5の場面では、これから大学へ行って調査を行なうという状況下で元教員と学生という役割関係がより顕在化するのに対して、図7の場面では、大学とは遠く離れた喫茶店という別空間で数ヶ月ぶりに会って近況を話すというような比較的カジュアルな話題や状況の下で、本来の社会的役割関係の枠組みが潜在化し、普通体の使用が相互に増えたと考えられる。場面や話題の性質によって、社会的役割関係の意識が顕在化したり潜在化したりする狭間で、Cのスピーチレベルにもゆれが生じるのであろう。

以上本節では、対話相手が同じであっても場面の違いがスピーチレベルに影響を及ぼすことを述べた。

5．3　Cの方言使用について

3．2で述べたように本稿では方言におけるスピーチレベルも分析対象とする。Cの接触場面における談話の特徴としてアルバイト・ドメインにおける「方言」の多用が挙げられる。Cの場面ごとの方言使用（韻律などパラ言語的な要素を排した方言形式のみの出現数）をカウントし、それを全発話数で割った出現率を算出した結果、心的距離の大きかった大学教授FT1に対して以外、すべての接触場面で方言形式が現れており、特にアルバイト・ドメインの、ラーメン店店長MA2に対して27％で最も方言使用が高かった。

一方のNSの使用する方言に関して言えば、アルバイト・ドメインのうどん店の先輩FA1（73％）と、ラーメン店店長のMA2（74％）はともに方言形式を多用してCに接していた。大学教員に関しては、普段から共通語（東京方言）話者であるFT1と、関

西出身だが東京に住んだ経験もある日本語教師のMT3には方言形式の使用は全く見られなかった。高校以来関西での生活が長いFT2のみ若干の方言使用（3％）が見られたが、アルバイト・ドメインのFA1やMA2に比べればその使用率は微々たるものである。

Cはフォローアップ・インタヴューで、「自分は結構関西弁を使っていると思う。先生と話すときは標準語を話さないといけないと思っているけど、コントロールできないときもある。アルバイト先のFA1さんやMA2くんには方言を使う。対話相手の言葉に合わせる」と述べている。つまりCは、大学（教員）ドメインに属する対話相手に対しては方言使用をなるべく控え、一方のアルバイト・ドメインに属する対話相手に対しては相手の方言使用に合わせて方言を多用しようとする志向が見受けられる。

Cは、九州出身のFA1の話す関西方言を「九州弁」であると思い込んでおり、「FA1さんは九州方言が強い。FA1さんの九州弁は、（意味が）わからなくても、（自分はそれを）覚える必要はないと思っている」と述べた。以下の例は、CとFA1の談話から抜粋したものである。

（談話例3）FA1との会話（1ー①より）会話参与者：C, FA1　（方言は波線で示す）

16　FA1　4時半か5時には起きとう
17　C　　えー大丈夫？
18　FA1　うん
19　C　　すごいなー
20　FA1　ほうてでも行くわ｛笑：ははははは｝
21　C　　え、なになに？
22　FA1　ほうてでも行くわ｛笑：はは｝
23　C　　｛笑：ははははは｝
　　沈黙＜10秒＞
24　FA1　｛笑：へへへ｝頑張って行くっていうことほうてでも行く
25　C　　これも九州の言葉？
　　沈黙＜11秒＞
26　FA1　腰がぬけてもがんばる｛笑：ははは｝
27　C　　え？
28　FA1　腰がぬけてもがんばる｛笑：ははははー｝

FA1の「（仕事に）ほうてでも行くわ（這ってでも行く）」という関西方言の発話（20, 22）を2回聞いても分からなかったCは、発話番号23で笑って済ませようとするが、そのあと10秒程度沈黙が続く。そこでFA1はそれを察し24で説明を加える。それに対してCは25で「これも九州の言葉？」と尋ねる。その質問に対するFA1の答えはないが、「腰が抜けても頑張る」というように言葉を変えて説明を添えている。

このようにCはFA1の話す意味のわからない語彙を九州方言と解釈し、フォローアップ・インタヴューでも述べたように、「わからなくてもいい」つまり覚える必要はないと考えているため、あえて自分から意味を聞くことはせず、適当に聞き流している。

ところで、Cによって使用された方言形式の内訳を調べた結果、最も出現数の高かったのは「～やから」という形式であった。これは、「おるやから（いるから）」「するやから（するから）」というような形で使用され、本来、文法的には「や」が不要である

にもかかわらず、「や」と「から」がユニット形成されるというCに特徴的な中間言語が見られた。

このように、Cは、主にアルバイトを通してNSの生の日本語に触れ、そこでの方言などの言語変種をCなりの解釈で受け入れ、また取捨選択し、時にはユニット形成するなどして、自分自身もその言語変種を使用している実態が明らかになった。そしてその方言使用場面は、主にカジュアル場面であり、普通体とともに使用され、相手の方言に合わせるというアコモデーションの意識が働いていることが分かった。

6　Cのスピーチレベルの選択基準

本節ではCのスピーチレベルの選択に関するこれまでの結果とその他の知見をまとめ、図8に示す。

Cは、スピーチレベルの選択基準として、「丁寧体使用の基準」と「普通体使用の基準」を持っており、それぞれ「対話相手に関する基準」、「状況に関する基準」、相手の言葉に合わせるという「アコモデーションの調整」の3つのサブカテゴリーに下位分類される。Cは社会的ネットワークの影響（特に毎日のアルバイト生活の影響が大）から、普通体の使用に慣れており、なるべく普通体を使用したいという気持ちがある。

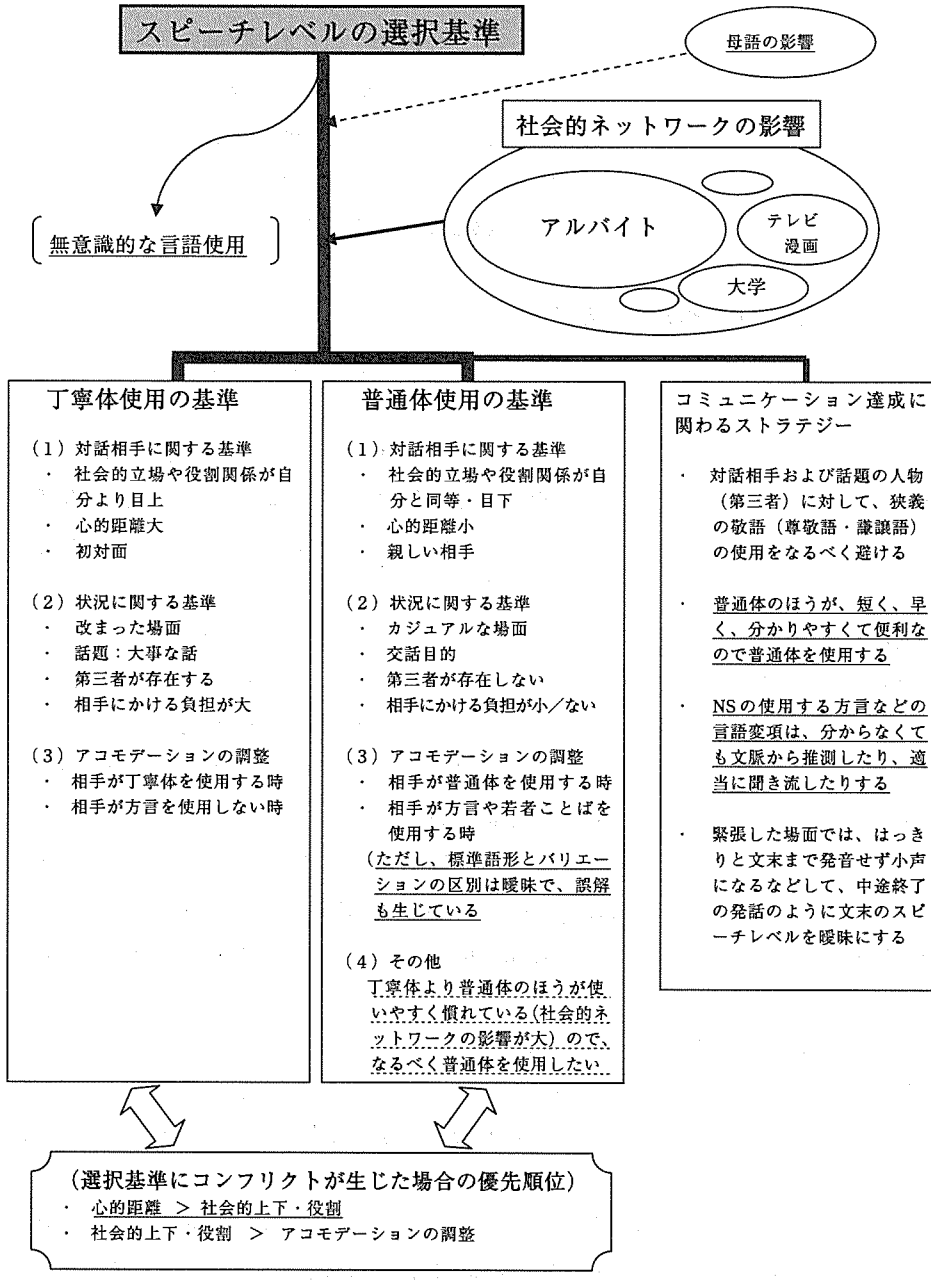
母語の影響に関しては、中国語使用の際に、中国語にも少なからず存在する敬語的な言語表現よりもむしろ態度や話し方といった非言語行動で敬意を示すというコメントが得られており、それがCの普通体の多用と関係している可能性もあるが、現時点では根拠を示すには至らないので、点線の矢印で表示した。

さて、丁寧体と普通体の選択基準にコンフリクトが生じた場合は、いずれかに優先順位を置く必要があるが、Cの場合は社会的上下関係や役割よりも心的距離の大小を優先させてスピーチレベルの選択を行う傾向があった。これは山口（2002）の報告と整合している。

Cの優先順位に関してさらに付け加えれば、相手のスピーチレベルに合わせるという「アコモデーションの調整」よりもむしろ「社会的上下関係や役割」を優先させてスピーチレベルを選択することが、大学教員FT2への丁寧体基調の談話によって明らかになった。

Cのスピーチレベルの選択基準には、先に述べた「丁寧体使用の基準」や「普通体使用の基準」以外に、「コミュニケーション達成に関わるストラテジー」というカテゴリーも見い出された。これは、先の二つとは完全に並列できるものではないが、スピーチレベルの選択基準と関連するストラテジー群である。このカテゴリーの中には、緊張したCが特にFT1に対してそうであったように、はっきりと文末まで発音せず、小声に

図８　Ｃのスピーチレベルの選択基準



※　下線部は NS と比較して C に特徴的、あるいはその傾向が強いと考えられるものである。

なるなどして消え入るように文末のスピーチレベルを曖昧にするというストラテジーも含めた。また、「普通体のほうが早くて、短くて、聞き取りやすい。(うどん店のように)作業をしながら話すときは特に便利」だというような、言葉の待遇面よりもむしろ機能面を重視している傾向も見られた。

「無意識的な言語使用」とは、Cがフォローアップ・インタヴューで述べた内容と実際の談話に現れたデータが時折食い違っていることから、そのように名付けた。NSも無意識的な言語使用をすることはあるが、ある対話相手に対して普通体基調で話したつもりが実は丁寧体を多用していたというような現象はあまり見られないであろう。

NSに関する先行研究と比較してCに特徴的、あるいはその傾向が強いと考えられる要素には図8で下線を引いた。これらは先にも述べたように、Cのスピーチレベル選択において中間言語的な様相を形成している要素であろうと考えられるもの[13]である。

先行研究では、ウチとソトがNSにとって重要な概念であるとされているが、Cに関しては、井出(1992：47)がウチとして設定している家族や親友などは社会的ネットワークに存在しなかった。また、教授やアルバイト上司、大学の若い先生など井出によると本来なら丁寧体使用が普通であるとされている人物カテゴリーにさえ普通体基調になる傾向が強く、言葉遣いに対しておおらかな職場でアルバイトをしている影響が普通体使用や方言の多用となってCに影響を及ぼしていることが明らかになった。

7　おわりに

日本国内における日本語学習者は普通、初級段階で丁寧体の学習から始め、初級後半で普通体が初めて導入されるが、丁寧体と普通体の機能や使い分け等については中級以上になっても授業等で特別の指導を受けることは稀である。しかしながらNNSは社会的ネットワークの中から積極的にスピーチレベルのノウハウを獲得していく。Cの場合はとりわけアルバイト・ドメインでの言語使用の影響が大きかった。本稿では、Cのスピーチレベルの選択基準がいかに構造化されているかを図解し、NSと類似の基準やストラテジー以外にも中間言語的な要素が存在することを明らかにした。

本稿で明らかになり6節でまとめた特徴は、Cという個人に特有のものもあれば他のNNSと共通しているものもありうる。本稿では紙面の都合上言及することはできないが、他の数名の調査協力者のデータも踏まえ、稿を改めて論じたい。

---

[13] 図8で点線を引いた「普通体のほうが慣れているのでなるべく普通体を使用したい」というCの傾向については、社会経験を積んだNSであれば普通体も丁寧体も同程度に使い慣れていると考えたためCに特徴的であるとしたが、このようなNSも多数いるのではないかと見ることもできる。ただ、Cの場合は自然習得者とは異なり、日本語を第二言語としてまず丁寧体から学習し始め、普通体はむしろあとから習得したことを考慮すると、NSと同列に論じることは難しい。この問題については今後また考察したい。

＜参考文献＞

井出祥子（1992）「日本人のウチ・ソト認知とわきまえの言語使用」『言語』21(12)大修館書店

加藤好崇（2006）「接触場面における文体・話題の社会言語規範」『東海大学紀要．留学生教育センター』26号　東海大学出版会

鈴木睦（1997）「日本語教育における丁寧体世界と普通体世界」田窪行則（編）『視点と言語行動』くろしお出版

橋本永貢子・三井栄（2005）「日中の待遇表現に関わる“ものさし”について―二つのアンケート調査の統計的分析から―」『社会言語科学会第16回大会発表論文集』

牧野成一（1991）「ACTFLの外国語能力基準およびそれに基づく会話能力テストの理念と問題」『世界の日本語教育』1号　国際交流基金　日本語国際センター

三牧陽子（2002）「待遇レベル管理からみた日本語母語話者間のポライトネス表示―初対面会話における社会的規範と個人のストラテジーを中心に―」『社会言語科学』5-1 pp. 56-74

山口和代（2002）「ポライトネスに応じた言語形式と人間関係の認知―中国人ならびに台湾人留学生と日本人母語話者との比較の視点から―」『社会言語科学』5-1 pp.75-84

Fan, S. K. (1994) Contact situations and language management. *Multilingua*, 13(3).

Malinowski, B. (1923) The problem of meaning in primitive languages. In C. K. Ogden and I. A. Richards (eds.) *The meaning of meaning*. Routledge.

Selinker, L. (1972) Interlanguage. *International Review of Applied Linguistics*, 10.